

神の約束を待つ

よみがえりの主は 40 日にわたって弟子たちに現れ、ご自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示された(1 :3)。そして、やがて到来する神の国について彼らに語られた後、再び彼らに「世界宣教命令」を与えられた(マタイ 28 :18? 20 参照)。彼らは、エルサレムから始まり、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまでキリストの恵みの福音の証人とならねばならない(1 :8)。

キリストの弟子たち及び初代教会はこの主 イエスの召命に応え、燃えるような情熱をもって、大胆に福音を宣べ伝えていったことを使徒言行録は生き生きと描いていく。迫害も反対も殉教の死の恐れさえも彼らの意気込みをとどめることはできなかった。

ところで、彼らをしてそのような宣教の情熱へとかりたてていった燃えるようなエネルギーの源泉は何であったか。それは第 1 に、イエスキリストの復活の事実である。復活の主に出会ったというこの衝撃的な事実が弟子たちのすべてを変革した。恐怖のあまり身を隠していた弟子たちは、何を恐れない大胆な宣教者に変えられた。迫害や殉教の危険を冒してまで彼らを伝道へとかりたてていったものは、よみがえりの主との出会いという決定的な体験であった。

第 2 にそれは、「上りの力」すなわち「聖霊の力」にあずかるという驚くべき体験であった。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで。わたしの証人となる」(1 :8)。この約束は、それから十日後、ペンテコステの日に成就した(言行録第 2 章)。おどろくべき現象の中で聖霊の力が彼らに注がれて、この小さき群れは燃えるような情熱をもって世界に出て行ったのである。

「上りの力」すなわち助け主なる聖霊の降臨を約束なさった後、復活のキリストは彼らの見ているうちに天に昇って行かれた(1 :9? 11)。弟子たちは主のご命令通りエルサレムにとどまり、滞在していた家の屋上の間にあがり、心を合わせ、ひたすら祈りつつ、主の約束を待った(1 :12? 14)。上からの力を受けるために彼らは待たなければならなかった。

信仰とは「待つこと」である。神の約束を待つことである。「主よ、イスラエルのために国を建て直してください。この時ですか」と性急にたずねる弟子たちのように(1 :6)、私たちもしばしば、時期や場合や理由や説明を知りたいが、そのようなものが与えられなければ安心できない。

それに対して主は、「父がご自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない」と言われ(1 :7)、ただ待つように言われた。待つとは、主権者なる神とその御心に絶対的に信頼して従うことを意味する。これこそ信仰の本質であることを弟子たちは学ばなければならなかった。

信仰とは「待つこと」である。自分を取り囲む状況がどうであれ、たとえ辛く苦しく、先が見えないような暗い時でさえ、なお神のご主権に信頼し、その御心にひたすら信頼し期待して「待つ」、これが神に生きる者の信仰の姿である。